

第7回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

企画2 オラトリオ《メサイア》

演奏会批評 (吉村溪氏)

『音楽の友』2009年6月号



ヘンデル《メサイア》を指揮する三澤寿喜

オーケストラ
ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《メサイア》

ヘンデル研究の泰斗・三澤寿喜が実行委員長を務めるヘンデル・フェスティバル・ジャパン(以下H.F.J)が、彼自身の指揮でオラトリオ《メサイア》の1741年初稿版を取り上げた。ヘンデル自身もついに聴くことがなかった版であり、今日でも上演が少ないだけに貴重な機会であ

る。この版における楽器編成は弦3部にオルガン、チェンバロ、そしてトランペットとティンパニの12名。木管を欠くにもかかわらず必要にして十分な管弦楽の響きがホールを満たす。三澤は今回《メサイア》への解釈に際し、全47曲を各曲の調性に着目することで、例えば第1〜4番や第19〜31番などをアタツカで演奏する試みを提示した。この枠組み設定によって作品に内包される劇性が立体的に表現され、優れた演奏効果を生んでいたことは特筆すべきだろう。また初稿版では各独唱パート(松村明子S、波多野睦美A、辻裕久T、牧野正人Bs)の意味づけがより鮮明に描かれており、実演上の制約を受ける以前のヘンデルの純粋な意図を知る上でも収穫は大きかった。H.F.J専属合奏団として組織されたキャノンズ・コンサート室内管、同室内合唱団も確かな力量を披露。学究と実演とが高い次元で融合した好例である。4月20日・浜離宮朝日ホール

●吉村溪

第7回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

企画2 オラトリオ《メサイア》

演奏会批評 (小山晃氏)

『音楽の友』2009年6月号



ヘンデル・フェスティバル・ジャパン、《メサイア》のステージ

オーケストラ
ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《メサイア》

2009年はヘンデル没後250年になり日本でも記念コンサートが様々に企画されているが、「第7回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン」としてオラトリオ《メサイア》が一夕演奏された。この作品の版は、例えばモーツァルト編曲版をはじめ

作曲家自ら改訂したなどの幾つかのバージョンがあり、指揮者、演奏家の考察、表現意図によって用いられる楽譜が異なってくる。ヘンデル研究家として知られる三澤寿喜指揮によるこの日のメサイア再現は、1714年の初稿版による演奏だった。その編成はまことにシンプルで、少人数の弦、トランペット2、ティンパニ2対、木管は一管も用いられず、独唱者こそ4人だが、合唱もわずか16人だった。この編成での演奏は、私は初体験だったが、その音は存外、小ぶりのホールでの質素な形の演奏が望まれたと思う。楽器が少ないだけに響きは清冽であり、合唱は透明感を保ち、独唱もくっきりと浮彫りされた。独唱勢は松村明子S、波多野睦美A、辻裕久T、牧野正人Bsとヴェテランそろい、様式感の明確な指揮に即し、余剰な感情移入もなく、メサイアの物語りを、歌い語った。

●小山晃